

### 3 北方領土の歴史

北方領土には昔から日本人の歴史が刻まれており、私たちの先人による開拓の歴史があります。

この章では、ロシア（旧ソ連）に占拠されるまでの北方領土の歴史のあらましについて調べ、先人の歩んだ道とその苦勞について考えてみましょう。

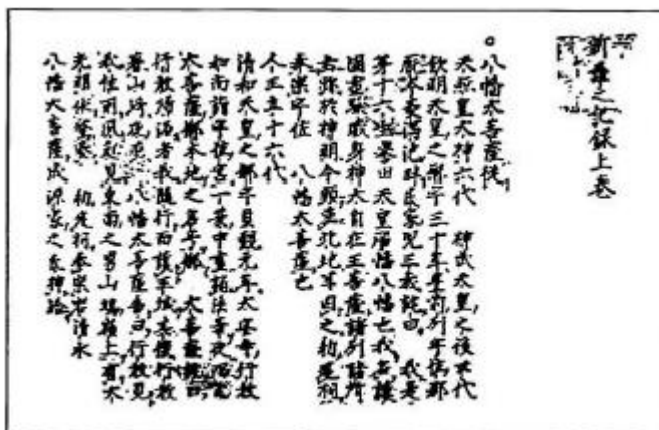
#### (1) 北方領土及び千島列島に住んでいた人々

北方領土及び千島列島に初めて人間が住みだしたのはいつなのか、まだ十分にわかっていません。しかし、各地の遺跡や遺物からみて、少なくとも数千年前から人類が生活していたと考えられています。

和人が北方の島々を知った以前から国後島、択捉島には、北海道本島と同じようにアイヌの人たちが住んでいました。また、千島列島には、クリル人と呼ばれる人たちも住んでいました。また、ある時代には、オホーツク人といわれる北方大陸系の人たちが住んでいたこともあったようです。

#### (2) 松前藩と北方領土及び千島列島

和人と北方領土や千島列島のアイヌの人たちとの交流の最初は、江戸時代の初め頃であろうと考えられています。蝦夷地（北海道）を、松前藩が治めるようになったのは、1604年（慶長9年）でしたが、松前藩初期の記録である「新羅の記録」によると、1615年（元和元年）にメナシ地方（東方の意味）に住んでいたアイヌの人たちが、ラッコの皮を松前藩主に貢物として贈り、藩主はこれを江戸幕府の将軍に献上したことが書かれています。



新羅の記録

ラッコは、日本では、千島列島海域でしかとれませんから、この頃もうすでに北方領土や千島列島に住んでいたアイヌの人たちとの深い交流があったものと考えられます。

さらに、このことは、1618年（元和4年）北海道に最初にやって来たヨーロッパ人である、ローマの宣教師アンジェリスが本国に送った報告書にも、「メナシ地方のアイヌが毎年100隻もの交易船でやって来るが、交易品の中にはラッコの毛皮が入っている」と記されていることからわかります。



一方、現存する地図のうち、北方領土及び千島列島を表した最も古いものとして、1644年（正保元年）、松前藩から幕府に献上された「正保御国絵図」があります。この地図には、知床半島と納沙布岬の東方に「クシミセ」と呼ばれる大小39の島々が書かれていて、そのうち34の島には「クナシリ」、「エトホロ」、「ウルフ」など、現在の島名とほぼ同じ名前がつけられています。

これは、ロシアのspanベルグたちが最初に千島列島を調査し、地図を作ったという、1739年（元文4年）より、約100年も前のことです。

松前藩では、本州の各藩と違い、アイヌの人たちとの交易によって得る利益が藩財政の重要な部分を占めていました。最初は、アイヌの人たちが交易品を持って松前にやってきたのですが、後には、交易地を海岸線に沿って設けるようになりました。（それは「場所」と呼ばれていました。）藩の交易船に、米、酒、たばこ、漆器、鉄製品などを積み、アイヌの人たちがとったサケ、動物の皮、鷲の羽根などと交換して持ち帰り、それを大商人に売り、利益を藩の収入にしていたわけです。中心は根室に近い厚岸でしたが、千島列島の島々との交易がしだいに発展するにつれて、1701年（元禄14年）には、キリタツプ（霧多布）に、やがては根室のノツカマップに場所（交易地）が置かれ、1754年（宝暦4年）国後場所が開かれました。

松前藩は、藩の力が弱く、広い範囲に点在する場所や沿岸の開発を進めることが難しかったので、有力な商人に漁業の経営を請け負わせて、代わりに高い税金を納めさせることにしました。（このやり方を場所請負制度といいます。）

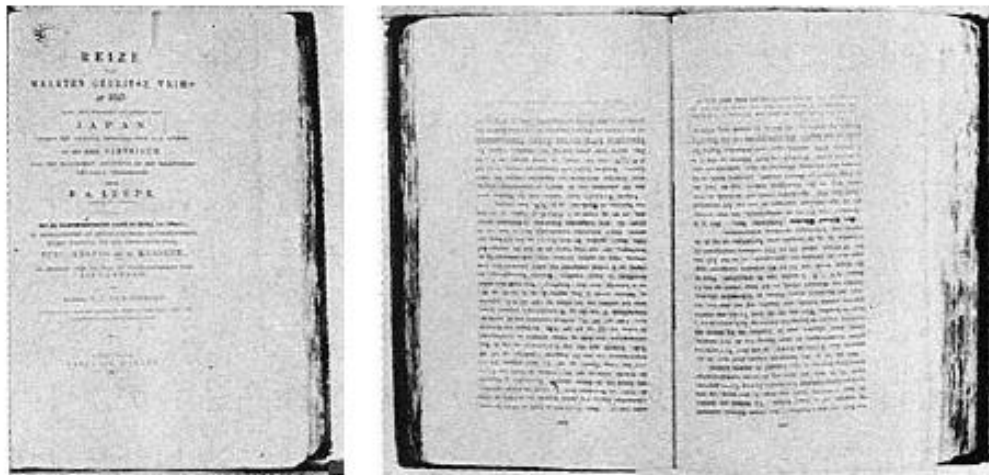
このようにして、北方領土の島々を支配する力を強めていった松前藩が、南下してくるロシア人の様子を知ったのは、国後場所が開かれた頃といわれています。



正保御国絵図（1644年(正保元年)）

### (3) オランダ探検隊の千島列島確認

日本の北の島々が、世界の人々の関心を集めたのは、マルコ・ポーロの「東方見聞録」<sup>とうほうけんぶんろく</sup>に書かれている金銀島のことなどが、そのきっかけであるといわれています。この金銀島の発見のため、オランダ、スペインなどが日本の北方海域の探検に力を入れました。そのなかでオランダのド・フリースを司令官とする探検隊は、1643年（寛永20年）に、濃霧<sup>のうむ</sup>のなかで択捉島を確認し、スターテランド（国家島）と名づけ、ウルップ島に上陸して、「<sup>じゅうじか</sup> 連合東インド会社」と書いた木の十字架を立て、コンパニースランド（会社島）と命名しました。このように択捉島とウルップ島を最初に訪れた外国人はオランダ人でしたが、その探検は、ウルップ島をアメリカ大陸の一部であると誤認するなど不完全なものでしたし、その後、オランダは領土権の主張をしませんでしたから、北方領土及び千島列島に関する問題は、日本とロシアだけの課題となりました。



ド・フリースの報告書

### (4) ロシアの南下

16世紀にウラル山脈を越えてシベリアに進出したロシアは、当時ヨーロッパ市場で高価に取引されていた毛皮を求めて東進しました。

そして、1697年（元禄10年）、カムチャッカまでのびたロシアの勢力は、千島列島にまで及び始めました。

1711年（正徳元年）<sup>しょうとく</sup>、コサックの反乱兵2名が、小さな革舟で、シュムシュ島とパラムシル島に渡り抵抗するクリル人を征服したというのが、ロシア人が千島列島に渡った最初であるとされています。



1786年（天明6年）択捉島へ渡来した3人のロシア人

それ以後、ロシアは、1724年（享保9年）<sup>きょうほう</sup>から9年間にわたる東方大探検で、アジア、アメリカ西大陸の関係を見極め、日本、中国、インドとの航路を開こうとして、日本沿岸の探検も計画していました。

1739年（元文4年）、ベーリング探検隊のspanベルグが、千島列島に沿って探検をしましたが、その結果、千島列島が、ラッコ、オットセイなど海獣の宝庫<sup>ほうこ</sup>であることがわかりました。

18世紀には、ロシアの南下する勢力は千島列島におよび、島々の名をロシア名にしたり、アイヌの人たちに税として毛皮を納めさせたりしました。このため、アイヌの人たちの生活は苦しくなり、ロシアに対する反抗が繰り返されました。

### （5）日口の接触

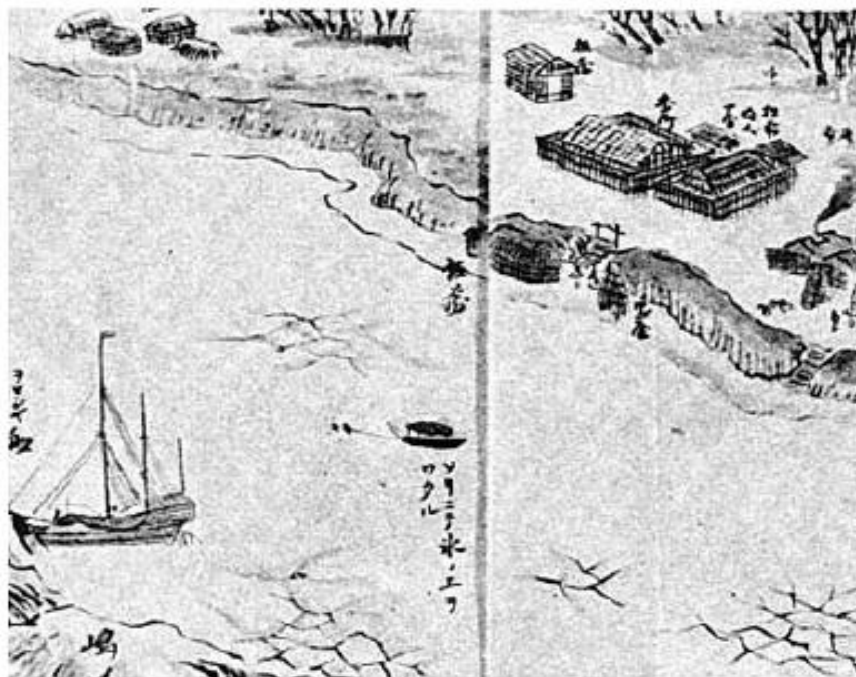
日本とロシアが、はじめて<sup>せつしょく</sup>接触したのは、1778年（安永7年）<sup>あんえい</sup>、千島列島のウルップ島を根拠地として、ラッコ捕獲事業をしていたラストチキン商会のオチエレデンが、3隻の船で根室のノツカマップに上陸したのがはじまりです。千島列島にいるロシア人たちは、本国から遠く離れているため、食料などの不足に悩まされていましたから、日本と交易して生活物資を得ようと考えていたのです。オチエレデンから交易の申し入れを受けた松前藩の役人は、「外国との交易は国法で禁じているので、今はどうにもならない、藩主<sup>しじ</sup>の指示を受けるから、来年回答する」といって帰しました。翌年、厚岸で再び会見し、「交易は許可できないが、ウルップ島のアイヌ民族をなかだちとして、択捉島のアイヌ民族と交易してよい、どうしても日本との交易を望むなら、長崎まで行って申し出なさい」といって交易を断りました。





1779 年（安永 8 年）魯西亞人応接書

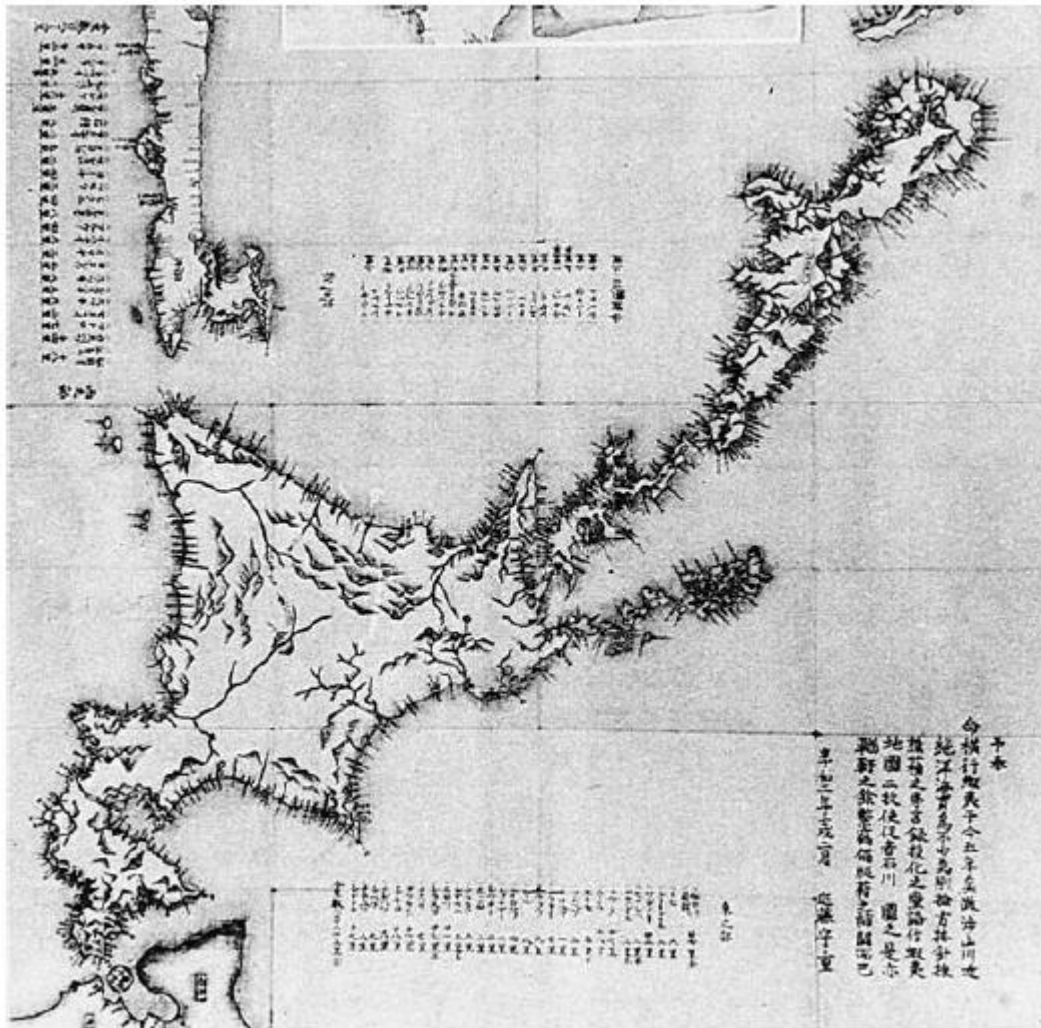
それから 14 年後の 1792 年（寛政 4 年）、ロシア皇帝エカテリーナ 2 世の国書をた  
 ずさえたラクスマンが、日本の漂流民 大黒屋光太夫らを伴い、軍艦で根室へやってきました。国書の内容は、「この地方で必要な生活物資を日本との交易によって得たい」と  
 いうものでした。松前藩は急使（注）を立て幕府に報告し、指図を仰ぎました。



根室港で越冬するラクスマン・光太夫一行とエカテリーナ号

（注）急使とは、急ぎの使者（使い）のこと。

根室で越冬して回答を待っていたラクスマンに対する幕府の返事は、「漂流民の送還については感謝する。江戸への来航は許可できない。日本の国法により通商できない。交易のことは長崎において話し合う」という内容でした。ラクスマンは、結局、長崎入港許可証を与えられただけで空しく引き返すことになりました。ラクスマンの報告によって、日本との交易が有望と考えたロシアは、ウルップ島に移民 4 家族をはじめ 58 人を送り、ロシアの基地を再建しました。



近藤重蔵が作製した蝦夷地図 1802 年（享和 2 年）

## (6) 北方領土の開拓

ロシアの千島列島進出は、幕府をはじめ国内に、大きな関心を引き起こしました。さらに、ロシアの勢力はますます強くなり、松前藩の力だけでは対抗することができなくなってきました。

幕府は、1785年（天明5年）北方領土と千島列島に役人を送り、実地調査を行いました。彼らは、大変な苦勞をして、国後島をはじめ、択捉島やウルップ島に渡って、地図をつくり、アイヌの人たちの生活の状況やロシアの南下の実績を調査しました。その一行の中に、最上徳内もがみとくないがいて、彼の書いた「蝦夷草紙」えぞそうしには、この調査のことが詳しく報告されています。



最上徳内



最上徳内の「蝦夷草紙」

1799年（寛政11年）幕府は、北方領土を直接治めることにし、近藤重蔵こんどうじゅうぞうをその処置にあたらせることにしました。近藤重蔵は船頭高田屋嘉兵衛せんどうたかたやかへえを伴い、北方領土の地に向かいました。

近藤重蔵は、これより先1798年（寛政10年）に、最上徳内を案内役として、国後島から択捉島に渡って調査をしましたが、そのとき丹根萌たんねもいに「大日本恵登呂府」だい にっほん え とろ ふと書いた標柱を建てて帰りました。



近藤重蔵



「大日本恵登呂府」の標柱



近藤重蔵の手になる  
「辺要分界図考」



その後 1800 年（寛政 12 年）、高田屋嘉兵衛が苦心して開拓した航路により再び択捉島に渡りましたが、このときもカムイワッカオイの丘に同じような「大日本恵登呂府」と書いた標柱を建て、日本の領土であることを明らかにしました。

支配をまかされた近藤重蔵らは、択捉島に本土の行政のしくみを取り入れ郷村制（注）をしいたり、漁場を開いたりしました。また、アイヌの人たちの生活の向上に気を配りました。

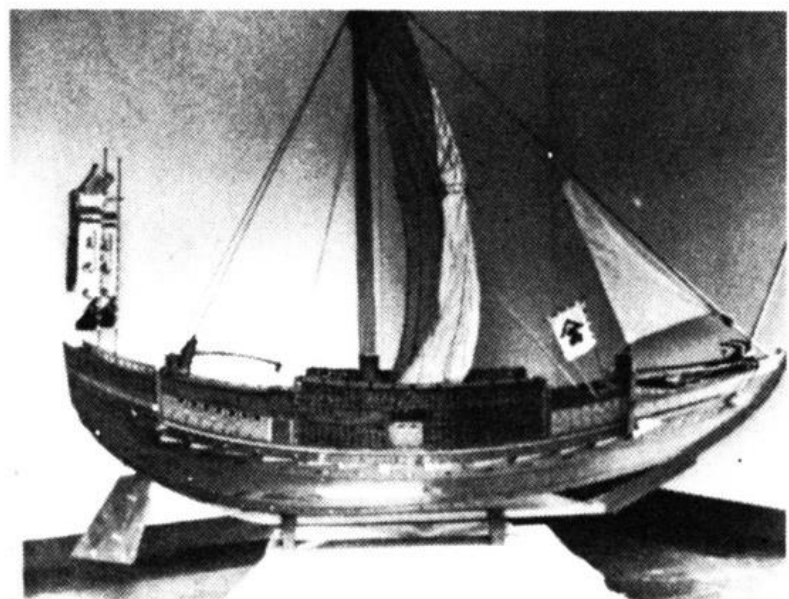


高田屋嘉兵衛

幕府は、択捉島などに役人を常駐させ、1801 年（享和元年）からは、南部・津軽両藩の兵、各 100 人あまりで守備にあたらせました。

開拓の仕事の中で、特に困難であったのは、国後島をはじめ、島々への航路を開くことでした。

嘉兵衛は、持ち前の緻密な研究心と大胆さで、未知の北の荒海に船を乗り入れて、安全な航路を見出しました。1799 年（寛政 11 年）、高田屋嘉兵衛は、非常に難しいとされていた国後島と択捉島の間には航路を開いて大きな貢献をしました。そのほか、択捉島に 17 か所の漁場を開き、アイヌの人たちに漁法を教えたり、漁具を与えたりして島々の開拓に尽くしました。



高田屋嘉兵衛の持船

「辰悦丸」

(1,500 石積、約 230 トン)

（注）室町時代、有力農民を中心に形成されてきた自治的組織をもつ村落の連合体。江戸時代には封建支配のための行政機構となった。惣（そう）。惣村。

また、幕府は、色丹島に船の避難港<sup>ひなん</sup>を設けたり、野付半島と国後島との間の航路や、国後島内の道路の開発などの事業を進めたので、物資の運搬や人々の往来は、次第に盛んになっていきました。

その後、ロシアとの緊張が緩んできたので、松前藩の要望もあって、1821年（文政4年）幕府は、蝦夷地の直轄<sup>ちよっかつ</sup>をやめ、再び松前藩に治めさせることにしました。

### （7）日露通好条約（下田条約）<sup>にしろ</sup>

ロシアの貴族<sup>きぞく</sup>で露米会社（注）を設立したレザノフは、12年前ラクスマンが根室に來航した時の幕府の回答に基づいて、1804年（文化元年）長崎に來航して、通商を求めました。幕府は、かれらを半年近くも待たせた上、通商を拒絶<sup>きよぜつ</sup>しました。レザノフは、日本の門戸を開かせるためには、武力で脅かすより方法はないと考えて、部下に蝦夷地や樺太<sup>から</sup>の攻撃を命じました。

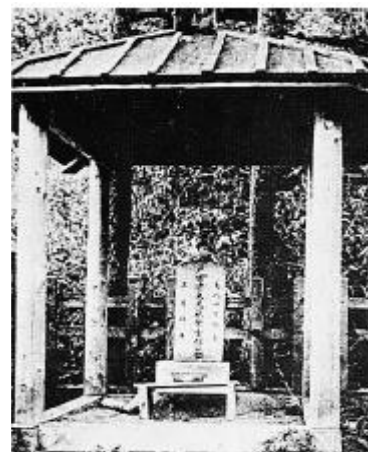


にそうたん き  
二隻譚奇

1804年（文化元年）、長崎に來航、通商条約締結<sup>ていけつ</sup>を迫って結局幕府の拒絶にあい、むなしく引きあげたロシア使節レザノフは、武力による交渉打開をめざし、1806年（文化3年）、部下に命じて千島・樺太の日本人居留地を攻撃させた。幕命によりあくまで不戦を保とうとした日本守備隊は戦機を失って敗走、択捉島の番所はとくに大きな被害をうけた。二隻譚奇はこのときの模様を択捉島在勤の雇医師久保田見達と愛間主人が記録したもの。

（注）北アメリカ(アラスカ)の植民地経営と極東や北太平洋における貿易の発展を目的として帝政ロシアによって設立された特殊な会社（国策会社）。

1807年（文化4年）、露米会社の武装船2隻は択捉島を襲い、南部・津軽両藩の守備隊を破り、番屋や会所に乱入し、物品を奪ったり、建物を焼いたりしました。松前奉行支配調役戸田亦太夫は、その責任をとって自決しました。



戸田亦太夫の墓

1811年（文化8年）、たまたま、北方領土及び千島列島近海を測量する途中、薪や水が欠乏して、国後島にたち寄ったロシア艦隊ディアナ号をみて、国後島を守備していた藩兵は、4年前のロシア船の択捉島襲撃事件もあったので、艦長ゴローニンら8名を捕えて、松前へ送りました。

翌年、艦長を奪われたディアナ号は副長リコルドが指揮して、再び国後島近海までやってきました。そこで沖合を運航する1隻の日本船を発見し捕えました。その船に乗っていたのが、高田屋嘉兵衛でした。嘉兵衛はカムチャッカまで連行されましたが、彼は、滞在中、ロシア語を勉強し両国間の事情を調べ、先年の択捉島襲撃事件は、レザノフが勝手にやったことであり、ロシア政府の命令でなかったことを説明し、ロシア政府が幕府に謝罪すれば、ゴローニンは釈放されるであろうと、粘り強く説得しました。その結果、翌1813年（文化10年）、ゴローニンと高田屋嘉兵衛の釈放交換が行われました。



V.M.ゴローニン  
(1776~1831) ロシア軍艦ディアナ号艦長。写真は、『日本幽囚実記』(V.M.ゴローニン著・海軍省訳・大正15年刊)所収のもの。

こうした事件が起こったのは、お互いの領土がはっきりせず、国境も決められていなかったことが原因でした。そこで、両国は、1813年（文化10年）に国境を決める交渉をはじめ、両国間の国境を、日本は択捉島以南、ロシアはシムシル島以北とし、中間にあるウルップ島は、両国の混住の地とすることで話し合うことになっていましたが、翌年、約束したロシア船が来なかったため、交渉は、正式には成立しませんでした。



1853年（嘉永6年）、ロシアは、特使としてプチャーチンを長崎に派遣し、通商を求めるとともに、再び北方領土及び千島列島、樺太の国境を決めたいと申し入れてきました。ロシアは、択捉島と樺太の領有を強く主張しました。これに対して幕府は、北方領土及び千島列島は、探検や開拓した歴史からみても日本の領土であることを主張して譲らず、交渉は難航しましたが、翌1855年（安政元年）、ようやくまとまって、伊豆半島の下田で、『日露通好条約』が結ばれました。



かわじきえもんのじょうとしあきら  
川路左衛門尉聖謨

交渉全権勘定奉行  
プチャーチンを「真の豪傑なり」と賞讃  
ディアナ号に代る戸田号建造について幕府を説き日本初の洋船建造をやりとげた。

プチャーチン

ディアナ号提督（海軍中将）  
川路聖謨の尽力を常に感謝していた。

この条約によって、両国の国境は、択捉島とウルップ島の間とし、択捉島から南の島々は日本の領土に、ウルップ島から北の千島列島の島々はロシアの領土にすることになりました。しかし、樺太は国境を決めることができず、今まで通り両国の混在の地とし、国境を決めないでおくということになりました。このことは後に大きな問題を残すことになりました。



日露通好条約

1867年（<sup>けいおう</sup>慶応3年）、江戸幕府は滅び、翌年新しく明治政府が成立しました。北海道には開拓使が置かれ、歯舞群島、色丹島、国後島、<sup>くんせい</sup>択捉島は、郡制の中に組み入れられ、移住する者も少しずつ増えてきました。

### （8）樺太千島交換条約

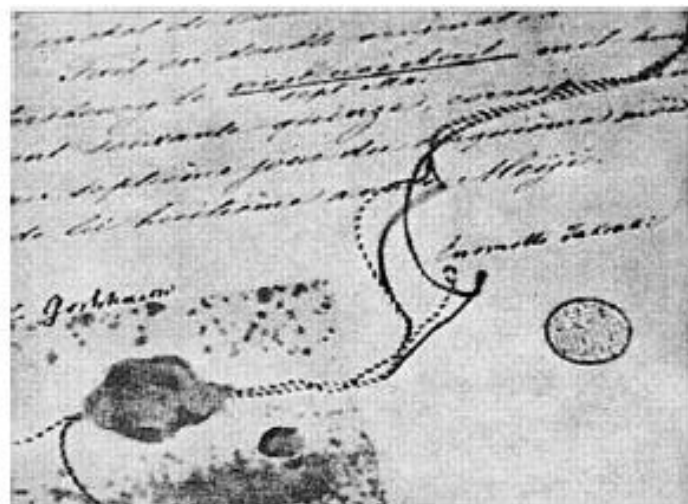
アジア進出の根拠地を樺太に築こうとしたロシアは、武力をもって樺太南部にまで進出し、この地方で漁業を営んでいる日本人と争いや<sup>こんらん</sup>混乱が絶えませんでした。

その頃、内政に重点をおかなければならなかった明治新政府は、樺太におけるロシアの南下勢力に十分対抗することができませんでした。

しかし、樺太の領有をあいまいにしておくことができないので、<sup>とくめいぜんけんこうし</sup>特命全権公使として<sup>えのもとだけあき</sup>榎本武揚をモスクワに送り、1875年（明治8年）、<sup>からふとちしまこうかんじょうやく</sup>『樺太千島交換条約』を結びました。この条約では、日本は樺太における一切の権利を放棄するかわりに、それまでロシア領で<sup>ゆず</sup>あった千島列島、すなわちウルップ島以北の18島を譲り受けるというものでした。



榎本武揚



樺太千島交換条約



こうして、日本が北方領土及び千島列島の全域を領有することが平和的な話し合いによって確定したのですが、失ったものも大変大きなものでした。樺太とウルップ島以北の千島列島とは面積といい、資源といい、比較にならないほど、樺太の方が有利であったからです。

その後、内政が充実するとともに、北方領土及び千島列島の開拓もしだいに進められていきました。1876年（明治9年）には、北海道開拓使長官かいたくしちょうかん 黒田清隆くろたきよたかが、はじめて北方領土及び千島列島の全島を視察して、開拓と警備の重要性を政府に進言しました。

1880年（明治13年）には、新しい行政組織のもと、択捉島、国後島、色丹島には村役場が置かれ、人々の移住も次第に多くなり、郵便局や小学校も設けられました。しかし、樺太千島交換条約発効後、ウルップ島以北に住んでいた住民は国籍所属を決めなければなりません。

その後、ウルップ島、シムシル島のアリュート人はロシア領へ引き揚げましたが、シュムシュ島のクリル人は色丹島に移住させましたから、ウルップ島以北の島々には定住する人がなくなりました。海獣保護区の設定をしましたが、外国の密猟船みつりょうせんが後を絶たない有様ありさまでした。

### （9）北方領土の発展と島民の生活

大正時代の終わりには、北方領土にも町村制が整えられ、択捉島は3村（留別村・紗那村しべとろ・薬取村）、国後島は2村（泊村とまり・留夜別村るやべつ）、色丹島は1村（斜古丹村から色丹村に改称）が置かれ、それぞれに村役場むらやくばが置かれました。歯舞群島は歯舞村（現在の根室市）に属していました。ウルップ島から北の島々は町村制が施行されず、北海道の根室支庁が直轄していました。

官公署、公共施設としては、営林区署、水産物検査所、さけ・ますふ化場、郵便局、警察署などがあり、択捉島の紗那には測候所や税関の事務所もありました。各村には小学校があり、その数は分教場も入れて39校もありました。



薬取郵便局（撮影年不明）



択捉島紗那市街（大正時代）



紗那市街の様子  
（2012年（平成24年）8月撮影）

島の人々の生活には、本州や北海道本島と違った苦労がありました。日常生活や生産に必要な物資、郵便物、新聞などの全てが海上輸送に頼らなければならなかったため、輸送費が加算されて物価が高かったといわれています。そのうえ、冬期間は、しけや流氷で、しばしば交通が途絶えましたから、どんなに生活が不便だったかがわかります。

日常生活で一番困ったことは、急病人やけが人が出たときです。医者や医療施設が少なく、設備も不完全であったため、重病人などは、船で根室などに送られましたが、手当てが遅れることも少なくありませんでした。

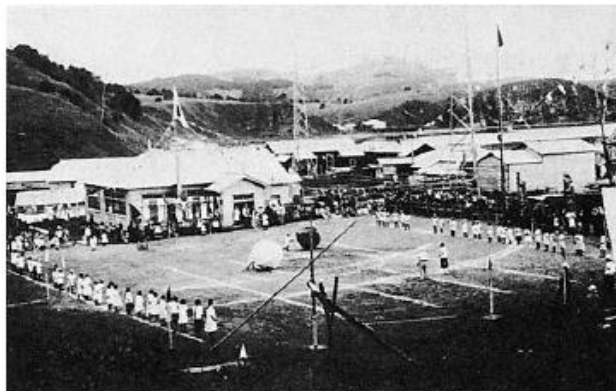


択捉島の冬期間の交通と輸送（撮影年不明）

娯楽施設もほとんどありませんでしたから、人々の楽しみは、運動会、演芸会、巡回映画などで、特にお祭りは村をあげてにぎやかに行われました。

島の人々の生活は、不便で苦しいことも多かったのですが、豊かな資源に恵まれ、施設もしいに整えられていったので、島をふるさとと決めた人々は、将来に希望を持って生活をしていました。

1945年（昭和20年）8月15日に北方領土に居住していた人は、1万7,291人（3,124世帯）でした。



色丹小学校の運動会（1939年（昭和14年））



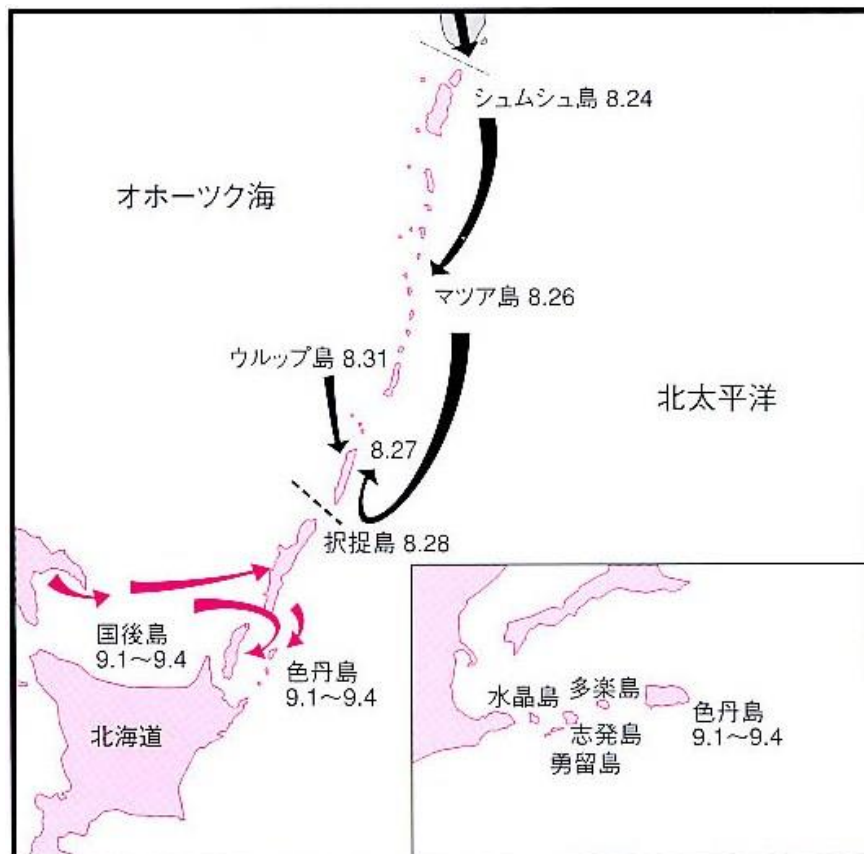
薬取村のお祭り（1939年（昭和14年）頃）

## (10) 占領された島々

第二次世界大戦で、日本の敗戦が色濃<sup>こ</sup>くなった1945年(昭和20年)8月9日、『日ソ中立条約』がまだ有効だったにもかかわらず、ソ連は日本に宣戦<sup>せんせん</sup>を布告し、ソ連軍は日本に対し戦闘<sup>せんとう</sup>行動を開始しました。8月14日、日本は『ポツダム宣言』を受諾し、翌8月15日連合軍に降伏をしました。しかし、8月18日千島列島の最北端の島シュムシュ島にソ連軍が侵攻し、戦闘状態になりましたが、8月23日局地停戦協<sup>きょうてい</sup>定を結び、日本軍は武器を引き渡して降伏しました。

その後、ソ連軍は千島列島を南下し、島々を次々と占領して、8月28日に択捉島に上陸を開始し、9月1日から4日にかけて色丹島、国後島、歯舞群島に上陸して、9月5日には北方領土を全て占領し、その兵力は9,440名であったといわれています。

このため、島で生活していた人々の中には、北海道本島との連絡も途絶えてしまい、これから先どうなるのかという不安から小さな舟で逃げ出した人もいました。中には、ソ連軍の監視をのがれるため、夜、暗やみの中で島を離れ、途中で荒海の犠牲になった人もいました。



1945年(昭和20年)8月18日以後  
ソ連軍は千島列島を南下し北方領土をも占領した

不安を感じながらも、脱出のすべもなく、やむなくそのまま島にとどまった人々も、1947年（昭和22年）強制的に日本に引き揚げさせられることになりました。わずかな身のまわり品を持って、樺太（サハリン）の真岡（まおかホルムスク）などを経由（けいゆ）して、大変な苦勞を重ねながら本土に上陸できたのです。



引き揚げた人々は、親せき、知人を頼ってそれぞれの地へ移っていましたが、大部分の人は、まじ交わりの深かった根室地方に落ち着きました。



納沙布岬上空からみた歯舞群島